

浄土

四月号



法然上人鑽仰会

昭和十一年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別授受記録誌第三五二号)
昭和四十一年三月二十五日 印刷 昭和四十一年四月一日発行

第三十二卷

第四号





迷えるものを包容するみ手

広隆寺講堂阿弥陀如来像



さまざまな悪しき行為を繰り返す罪深い人間。地獄に墮ちることが決っている人間。その愚かな人間が命終ろうとするとき地獄の猛火に迫められる。すると、アミダ仏の徳を説き、猛火も一変して清涼な風となる。一瞬のうちにわが身は極楽に生まれ、無上の道へ向かおうとする心を起こすことになる。それが下品中生げぼんちゅうしようの者のすがたである。と経は説く。

愚かな行為を繰り返さざるをえない私。その私をガツチリと受けとめるみ手。信頼しきるに充分なほとけのみ手。それがこの広隆寺に安置されているアミダのみ手である。

左右のみ手がつかず離れず、それでいて実に安定しきった両手。迷い悩める凡夫をこの両手がしっかりと包み、迷いの世界から逃れようと走り廻る愚かびとを受け容れて微動だにしそうもないみ手でもある。安心して任すことができる、まさに下品中生のお姿である。

だが、意識され下品のお姿ではない。現にいま、迷える者のために法を説かれている説法印にほかならないからである。いま、わたくしと共にあるアミダさまがここにおられるのである。こんな力強いことはあるまい。わたくしを現に見守っておられるみほとけのみ手をそぞろ忘れてはならないのである。



虚仮といふは、
ことさらに結構する輩なり。
好まずして、自然に虚仮ならんは、
往生の障にあらず。

法然上人御法語

— 目 次 —

表紙「たんぽぽ」松濤達文画

随想	田中夢恵・太田錦真	(2)
御忌によせて 新しい人間像の発見	宮林 昭彦	(4)
初期鑽仰会のなつかしい人々	川端 大祐	(10)

— . — . — . — . —

浄土 信と身	藤井 実応	(12)
無媒随録	須藤 隆仙	(14)
仏教人生訓 無物中無尽蔵の思想	宝田 正道	(16)

— . — . — . — . —

お経の話 念仏は一切に通ず	村瀬 秀雄	(18)
家康と三河一揆	鶴田 湛泉	(25)
ご法語をいただく		(7)
はなまつり		(8)
仏像解説		(21)
人生相談 進学期を迎えた子と母		(31)
信仰の手引 この身をきよめて		(32)
連 続 話 みんなの法然さま・大衆のために	高橋 良和	(26)

想

随



声

田中 孝恵

声を出して話をしたり、歌をうたったり、詩などを朗詠したりすることは楽しいことです。

美しい音楽的な声をきくことも楽しいことです。そして音楽や歌はそれぞれ何らかの気分を表現しております。明るく楽しい浮き浮きした気分になる歌もあれば、哀愁の気分を持った歌。静かな平和な気分の歌などがあり

声を出して称える念仏よりも観念の念仏の方がすぐれた功德があると言った学者もありました。どちらの念仏がよいかということがその当時は大きな問題であったようです。

そこで法然上人は選択集の中で、念仏は声で称える念仏である、と宣言されました。

それには次のように述べておられます。

「念と声は同じである。観無量寿経には、声を絶やさぬようにして南無阿弥陀仏と十念を称えなさい。とあるから声と念は同じもので、十念の念は声のことである。」と。

その他のお手紙や問答などにもよく、声のことについて述べておられます。

「ただ口に南無阿弥陀仏と称えて、声に従って決定往生すなわち必ず往生することが出来るのだという思いをしなさい。その決定往生の心が深く信ずる心になるのです。」

と仰せられ、また「仏の本願の称名であるから声を本体とお考え下さい。自分の耳に聞こえる程度に称えれば高声の念仏のうちにはいるのです。」

とも仰せられております。

もののみかた

太田 諦真

健康の維持と時間的経済との理由で、永年毎日学校への通勤に自転車を利用しているが数年前にバックミラーをつけてみた。そして利用価値のすばらしさを知った時、自転車のアクセサリ位に思っていたことが、惜しまれてならなかった。いかほど前方が見えても左右両側ははっきりみえないし、後方は勿論何もみえない。止むを得ず首を廻し、からだをひねって補っていることは論をまたない。

「こちらをよくみて」「今日はこんなものをみた」「それなら前にもみたことがある」「あれ以来僕の人生観は変わった」とか、常日頃みるという語を盛んに使っておるが、一体われわれはどんなみかたをしているだろうか。前方をよくみ、将来を考えることの重要性は誰しもよくわかっているが、過去をふりか

ます。ドレミファなどの音の組み合わせがこれ程色々な気分をあらわす歌や音楽になるのですから考えれば不思議な気がします。

音楽や歌は、人の心を引きつける力をもっておりまう。歌でなくても声や音は人の心をひきつけます。声のきこえる方に人の心が向かいます。

だから宗教でも音や声は大切なものになっております。宗教音楽は荘厳な清らかな気分を表現して人の心をひきつけ、聞く人の心を洗いきよめ聖なる気分に導くのです。

仏教には声明しょうみょうというものがあります。これは音声によって聖なるさとり境地に人の心をさそい入れます。お経をよむことも念仏を称えることも声明の中に入っておりますが、詩や文章に節をつけたものもあります。

浄土宗の念仏は南無阿弥陀仏と声を出して称えることになっております。

法然上人が「観念の念にもあらず」と仰せられました、念仏には観念の念仏というものもあるのです。これは阿弥陀仏を心の中に思ひ浮べることなのです。

声は不思議な力をもっております。

法然上人は念仏の声に導かれて決定往生の思いをなさったものと信じます。

我々凡夫が、いくら阿弥陀仏や浄土の研究をしてみても観念的になるばかりで救われたという実感は出てまいりません。

合理主義的教育を受けた現代人は理論的な説明や証明を与えられないと気がすまないから理論的研究もすることが必要でしょう。

けれども宗教というものは理論的な研究だけでは納得の出来ないものです。

だから法然上人は

「往生の業は念仏を先となす。」

と仰せられ、また

「学生骨になって念仏や失わんずらん。」とも仰せられました。

先ず念仏を声に出して称えることが必要なのです。

私は南無阿弥陀仏と称えて決定往生の思いに到達するまで称名念仏の声の不思議な力に引かれて行ってみようと思います。

えり、反省することのあまりにもうかつであることを考えると恐いことである。過去を反省してこそ、よりよき発展のあることもわかりきったことである。「あきめくら」「論語よみの論語知らず」とはよく言ったものだ。論語の為政篇の温故知新を学んだものは、恥かしい限りである。

科学が進歩し文化が向上する反面、マイナスの面の多くなることも考えさせられる問題である。荀子にも、「君子博く学びて日に己を参省すれば、則ち知明らかにして行過なし。」と説かれている。その他仏語の、直指人心見性成仏、真如觀など味うべきものがたくさんある。

要は各人がみることのむつかしさに気付き前向きの姿勢でぐんぐん進むかたわら左右両背面を充分注意することが大切である。こんなすばらしい歌をきいたことがある。

極楽は西にもあらず東にも

きたみちさがせ みなみにぞある

時には口にして自分をいましめ、また人さまにもお伝えして楽しんでいる。

御忌によせて

新しい人間像の発見

— 法然上人の偉大性 —

宮 林 昭 彦

一
法然上人は、一般には日本浄土門の元祖と考えられ、鎌倉期にあらわれた宗教改革者のようにとりあつかわれているが、ただ、それだけの意味をもった人であろうか。

上人の果たされた役割は、一宗派の教義や制度の改革を果したというだけの、狭いものではなく、全人類の思想史の上に、無限の展望をあたえ、人間の生活を根本から、新しくした人というべきではなからうか。

法然上人こそ、日本人でありながら、巍然として、世界のあらゆる思想、文化、宗教の頂点にそびえたつことのできる人だとおもわれる。

仏教についてみるならば、二千五百有余年前にインドに出世された開祖、釈尊が、人類思想史上に果たしたと同じ役割りを、再び、日本において、日本人として果しておられるのである。いわば、上人こそ、新仏教の開祖というべきであろう。

釈尊は、その当時のインドの二大思想、すなわち、一切が梵から流出してくるといふ、転変説と、一切が原子のよななものから形成されるという、積集説とを拒けて、人間を一切の権威と独断とから開放された。そして、そこに、人間のあるがままの人間を自覚し、発見されたのである。仏教とは、人間の智慧の覚醒による宗教ということもで



きよう。

釈尊によって示されたところの自分みずからを、現実のこの刹那に改造し、救済し、救われた人間は、人類にとって、まったく新しい人間のタイプであった。それは孔子や老子などのもたらした人間像とも、根本から異った、東洋における、新しい人間の型であった。

しかし、このユニークな個性的現実の釈尊のすがたは、われわれの願いにもかかわらず、いかにしても、如実に、これを知ることが絶望であろう。

ここにおいて、われわれは、日本の鎌倉期にあらわれ



た、法然上人その人において、釈尊仏陀そのもののすがた、すくいを得ることができたのである。

る。

上人の全人格体のなかに、新しい人間像に邂逅するのである。新しい発見である。

時代を同じくして、いくたの仏教者を、われわれはみることができが、しかし、何か局限された感じを、人間としてもっているのであるが、法然上人においては、そのことが感じられず、局限があつて、局限が感じられない、不思議な、例外的なところがある。

つまり、つよい個性をもちながら、万人をつつむかぎらない大きさが感じられるのである。

二

法然上人は、一一三三年に生をうけられた。九才のときに一家にふりかかった災厄で孤児となっておられる。二十四才のとき、保元の乱、二十七才のとき平治の乱を見、平家が壇の浦で滅んだ、一一八五年は、上人五十三才であられた。

つまり、兵どもの世界に育ち、その時代のなかに生き、かれらの運命をその眼でみている。地方に蔓延した闘争は、中央にも相ついで起っている。南都と北嶺の寺院も、またそれぞれ闘争堅固である。闘争堅固を末世末法の特色というならば、まさに、末世末法の到来の時期である。

世の知知は闘争の世界である。兵という在り方自体がただに報ゆるにあだをもつてするという上に立っている。それをほかにしての存在理由はないのである。敵がなければ、仮想敵国を設ける。仮想の敵もなくなれば、自陣の中に敵をつくりだす、といった状態である。

敵をうらむことなかれということは、そういう兵の世界の否定でなければならぬ。兵の世界を超え、次元を異にするところに立つことを意味する。

法然上人の選ばれた道は、いかにすれば、うらむことのない世界、恩讐のかなたの世界にいたる道の追求であった。

上人の一生は、そのことを実践的に示している。仇、敵をあわれむという慈悲のころによって、仇も敵も、衆生の一人として救済の相手に化しうるのである。

それは、自力においてでなく、弥陀の本願を深く信ずることにおいて、自分一人ではなく、衆生をその救済にあずかる、証しをたてられたのである。

まことに、時代を画することといえよう。

三

法然上人には、時代が音をたてて崩れおちてゆくさまを、その眼で見、体で味わえたのである。まさに、末世末法の時代に生き、それを身近かに体験されたのである。

人間が餓鬼、修羅となって、名利と生存の巷に右往し左往するという現実の中に生きてこられたがゆえに、上人のさけびは、自己をふくめた、世界のさけびであるといつてよい。法然上人は、もはや、弥陀と人間各個とのジカの交渉しか、真実として認めなかった。

または、それこそ、唯一の情感の世界である。

上人は、単純のようで、複雑至極な世界を経験しているのであり、念仏生活の一刻一刻一瞬一瞬が、新しいよろこびで満ちたもので、有りがたく尊く感じられ、そういう透明な光りと、清浄なよろこびの中に、法然上人はおられたことだとおもわれる。

お念仏のすくいとは、だれにも、容易にあたえられる。しかし、上人の生活の状態の大きさ、深さは、われわれとは比ぶべくもない、天地雲泥の相違のものであることが、だんだんと暗夜の星くずがみえて、増してくるようになり、それが次第にわかってくると、極小と極大の問題も理解され、人間のいかに複雑なものであるかが感得されるのである。そのとき、いまさらに、法然上人の人類思想史の上における、ほんとうの大きさに気づくことができるのではなからうか。法然上人のお念仏の道は、現代から未来に通ずる正しい人類のみちしるべとなることは必定である。

御法語をいただく

虚仮といふは、ことさらに結構する輩なり。好まずして、自然に虚仮ならんは、往生の障にあらず。念仏の信心をおこしたらん人は、必定して往生すべし。(勅修御伝、第二十四)

ある日のこと法然上人は、二三のお弟子たちといろいろ話をしていました。その中にいた安樂房が、こう質問しました。

「虚仮の者は往生できないと善導大師が申されていますが、このことはどのように心得たならばよろしいのでしょうか」

お念仏を称えるのには、もとよりまことの心がなければなりません。それならその反対の真実でない心というのは、どのような心かといえ、それは「外に賢善精進の相を現じて、内に虚仮を懷く事」という有名な言葉があります。法然上人はこの言葉を説明して「内はをろかにして、外にはかしこき人とおもれんとふるまひ、内には悪をつくり、外には善人の様子をしめし、内には懈怠の心を懷

きて、外には精進の相を現ずるを、真実ならぬ心とは申也」

と仰せられ、また「虚仮の行というのは、心の曲っていることは毒蛇のようであり、他を傷けることは毒虫のようであるから、これを雑毒の善というとも仰せられています。

虚仮というのは、中味のない偽物ということであって、最もいやしく避けなければならぬ心のあり方であります。

こうした安樂房の質問に対して、答えられたのがこのご法語であります。

ことさらにというのは、わざわざ特別にということ、故意にすることです。結構というのは、そのようにつくることです。

ここでは優れて立派という意味ではありません。つまり善導大師は虚仮の心のもものは往生できないといわれましたが、故意に虚仮の行をなすもののことであるということです。

しかし知らずの内に虚仮になつてることがあります。凡夫の情として、他人から侮られたくない気持があります。十分に納得できていないのに判ったような振舞をすることがあります。知ったかぶりをするというのもそ

れであります。偉く思われることを目的にしているわけでないが、正味よりは少々飾ってみせたい気持があり勝ちです。

凡夫はどこまで行っても凡夫であって、情けないことに、そこから抜け出ることができません。結果からみて虚仮と同じことになっても、お念仏を称える信仰があれば、必ず往生ができます。

このご法語に続いて、御伝には次のように訳されています。

「善導おはしまさざりしかば、われらいかでかこのたび生死を離べきやと、仰せられて、落涙し給うあいだ、聖老房、法力房、安樂房みなともに、涙をおさへて、信心をましけり」

まことに劇的な場面というべきでありましょう。善導大師のお導きをいただいて、お念仏の信仰によって初めて凡夫が救われることになりました。この感激で、法然上人を中心にお弟子たちが一諸に感涙にむせんたというのであります。

「往生は念仏の信否によるべし。更に罪惡の有無にはよるべからざるなり」
のご法語の通りであります。



花 ま つ り

春は花とともにやってくる。

梅一輪一輪ごとの

あたたかさ

やわらかい春の光が訪れてくると、自然は何のいつわりもなく、その活動を始める。梅の一輪、一輪は、春のおとずれを目に教えてくれる。

花と言えば、日本では何と言っても桜の花である。山と言えば富士山であるように、桜の花は、日本の国花である。心残りなく散る桜の花は、古くは武士道にもたとえられたが、そうしたことは別としても、日本の春から桜の花を除いては、春はない。そして、この桜

が満開ともなるころに、花まつりがやってくる。ここに至って、春は、たけなわとなるのである。

奈良七重 七堂伽藍 八重ざくら 芭蕉

この句は、まことに花やかな情景である。いまでも、奈良に行けば、そうした景色が見られるが、京都の円山公園から見た知恩院の景色なども、この句にぴったりあてはまる。豪華絢爛^{けんらん}という言葉は、こうした情景をいうものであろう。

それにひきかえて、花御堂は、まことにささやかで、つましやかである。そんなに古い話でもないが、花御堂といえ、れんげやたんぼの花で飾られた屋根が多かった。いかにも粗末なようであるが、花御堂はこれが一番似合う。はだかのお釈迦様にも、につかわしい。しかし、この頃の都会の子供たちは、も早や、れんげやたんぼを知らない。田舎の子供達でも、れんげを昔のように見る機会が少なくなった。農業が発達してきた今日、れんげ草を肥料がわりに使う必要がなくなってきたからである。車窓から、なの花の黄色と、れんげの赤色との田園を見ることも、この頃では少なくなつた。時代の変遷と言えば、それまでであるが、自然をなつかしむ人々には、心淋しいことに違いない。

つつましやかな花御堂は、それがいかに粗末な花であつても、言い知れぬ春の喜びと、なごやかさが、その囲りに漂

っている。それは、子供の夢である。そして、花御堂のつましやかさは、その囲りにただよっているなごやかな雰囲気に、びったりあっている。仏の教も、いうならば、こうしたところに、本当のものがあるのであろう。

私達の囲りは、あまりにも騒がしく、物苦しい。科学が発達し、文化が開けることは、人間生活にとって、喜ばしいこととに違いないが、それと逆比例するかのようには、私達の囲りには、めまぐるしく、色々なことが続いて起る。全日空、カナダ機、BOAC機と、僅かの間に起った空の惨事は、近代科学のもたらした悲劇である。花御堂のお釈迦様などは、とても考え及ばなかった事に違いない。こんなとき程、人生の無常を感じることはない。つい先程まで、元気で飛び立った人が、数時間後には、悲惨な姿となってしまう。

送る人も、送られる人も、誰かこうした事を予期していたであろうか。

しかし、生者必滅ということは、今更始まったことでない。それどころか、三千年前に、釈尊が、われわれに強く反省を求められた、自然の真理なのである。われわれは、早く、今この時に、生者必滅の真理にめざめなければならぬ。飛行機が落ちてからでは、遅いのである。そして、この真理に本当にめざめたとき、念仏行が自から出てくるはずである。

中国の唐の詩人は、

年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず

と言って、来る春ごとに花は同じ様に咲くが、その下にやってくる人は、年々同じ人でないと、詩の中で人生の無常をなげいている。

しかし、ただなげくだけでは進歩はない。せめて、われわれは、花まつりを迎えることに、生者必滅の真理を説かれた仏のみ教えを、三省し、よりよい人生へと更に一步進めたいものである。

(安居香山)

業界一の銅瓦・銅板葺一般・模様葺・別製
金具一式私の先祖の宮及び寺、六角堂、納
骨堂及び鐘楼の銅材一式手間代も寄進、神
様仏様へ報恩の奉仕故安く良く、他所には
出来ない何代も研究せる卓越せる最高技術
最低価請負業者も悔なき様。御相談無料。

東京都文京区春日1丁目9の28

銅瓦職協
相談役顧問
設計及監督
電話

石黒工業

(812) 1551

私が鑽仰会の編集部に入れて頂いたのは、

昭和十二年の正月であった。

まだ大正大学の学生であったから正式の職員ではなかったけれども、真野先生や、佐藤賢順先生その他そうそうたる先輩の中に交って、編集や運営についての会議に参画することとは実に晴れがましい事であった。

卒業論文に自信のなかった私は研究室に残る事を断念して、宗門ジャーナリストとして立ち

たい希望を持っていたから、「浄土」の編集を格好の職場と考えて、研究室の主任教授の真野先生に

お願いしたのであった。

前年大学の学長問題にからんで、学生ストライキの主謀者の様にみられた私は、真野先生にえらく叱られたものだが、事がすめば、先生はカラッとして学生をいたわってくれる人であった。

当時は真理運動（友松円諦師主幹）を始め仏教界が活発に動いていたので、「仏教復興」の声が盛んで、宗門ジャーナリスト華やかな

時代であった。

鑽仰会の上層幹部の先生方については、先般「浄土」三十周年特集号に紹介されていたのでなつかしく拝見したが、当時の本部職員の若い人たちについてここで語らせて頂き度い。

今は大方故人となり、或は宗門を去ったけれども、忘れえぬ人々ばかりである。

初期鑽仰会の

なつかしい人々

川 端 大 祐

かつての浄土宗務所の立派な建物の前、芝プールのそばに小さな木造二階建の小屋があり、そこに本部が設けられ、編集と庶務と会計が同居していた。菊ちゃんと云う夜間中学生が給仕として働いてくれていた。

編集主任は道瀬幸雄さんで、かつては左翼の闘士であつたらしいが、その頃はイデオロギー的な事はおくびにも出さず、編集一途な

熱心な仕事振りであつた。大日本印刷によく校正に連れられて出かけたものであつた。

姉さんは築地のさる料亭のマダムで、山本五十六大将のひいき筋だとも人からきかされたが、道瀬さんはその事にふれたがらなかった。後日私が応召し、戦争たけなわの頃、私の留守家庭の長岡市まで買い出しにみえたそうであるが、苦しい東京の空で苦しい生活を

どう切り抜けた事か。出版社を経営されたとも風聞したが、成功した事もきかない。

会計に金孝敬さんがいた。金さんは朝鮮の出身であつた。宗教学研究室

の新進学徒で、シャーマニズムの研究は当時学界に知られ始めていた。金さんは学問の傍ら真野先生の恩義に感じて、会の面倒な会計を担当して毎日出勤していた。学問の世界では何のへだてもないのだが、一般の社会生活となると、やはり半島出身と云うことがハンディとなるものか金さんにはどうしても結婚のチャンスがない様であつた。大学の講座も

仲々廻ってこないままに消息不明となって今日に至っている。

日韓を結ぶ大切な人であったが惜しい事である。

庶務主任は辻重光さんであった。東京のお寺の住職さんとは思われぬ色黒々とガツシリした体軀あったが、江戸ッ子らしいキップのいい人であった。陸軍少尉として支那事変とともに応召されやがて戦死をされたのは惜しい事であった。

東慈道さんはその頃東京普通宗学院の専任講師であったが天光院（真野先生の自坊）の寺役一切を引き受け、「浄土」の執筆陣の開拓に活躍していた。やがて私もその年の四月から東さんの下について宗学院の講師となるのだが、私は境遇の似ている東さんについては殊の他恩を感じ、又その後の逆境についても同情を禁じえない。今どこにどうしておられるやら、折にふれては胸のいたむ想いがするが、真野先生や「浄土」については忘れてならぬ人である。

東さんの二男の高秋君の命名者は吉田絃二郎先生であるが、東さんは吉田さん、佐藤春

夫先生のお氣に入りであった。

昭和十三年応召し、奥さんが働きに出る様になった。幼い子供をかかえて働く夫人の苦勞は並大抵ではなかった。私の応召後東夫人も長岡へ子供疎開に相談に來られたが、その夜が長岡大空襲であったのも悪縁と云うものであろうか。

昭和十五年夏戦乱はいよいよはげしく、召集状が氣になって、私も東さんの境遇となるのを恐れて、郷里の県立長岡高等女学校へ転任する事になった。

病氣の真野先生とお別れして帰郷するのは辛い事であったが、生きて行く道のけわしさに止むをえぬ決意であった。

やがて私も昭和十六年夏仙台に召集され、南方に派遣された。

この他専任のスタッフではなかったが、宗務所の調査課長であった島野禎祥さんも「浄土」の編集では忘れてはならぬ人であった。当時の里見執綱の信任絶大な手腕家で大人の風貌があったが惜しい事に戦時中逝去されたと風聞した。

その他編輯に関係したなつかしい人々には

佐賀一海、一ノ瀬直行両氏がある。一ノ瀬氏は地味な作風ながら芥川賞候補として当時幾度も推せんされた作家であるから宗門の人はごぞんじであろう。現在活躍している村瀬秀雄氏は一ノ瀬氏の御令弟と思うがどうであろうか。その他赤尾光雄、中村康隆、佐藤良智、吉水靈家の諸氏が鑽仰会の本部にたえず出入して、会を明るく、活気づけてくれる青年学僧の方々であった。

現在の花形竹中先生は私の一年先輩であるが当時已に学者として地道に研究生生活をされていたのであろうか、鑽仰会には殆ど顔をみせなかった。ジャーナリズムを好まなかったのかもしれない。而し結局学者として分野は異るとしても真野先生に代って宗教学研究室を背負う人となられた事はうれしいことである。

浄土三十周年を迎えて、その土台石となった人々の想い出を綴って、その地味な功績をたたえて、今はなき人々には回向し、宗門を離れた人々には未来の光明を願ひ、宗門の指導者となられた人々に対しては、縁の下の力持ちを忘れない様にとお願いする次第である。

浄土信仰問答(四)



信と身

藤井実応

A 私は頭がわるくて、その上、年をとるにしたがって一層

おぼえがわるくなり、せっかく尊い有りがたいお話を聞いてもすぐに忘れてしまって、家へ帰って、今日はこういうお話があったかと聞かれても、ただ「有りがたかったよ」というだけで、ろくにお話を取りつぐこともできず残念なことです。

B 残念どころか、たいへん結構なことではありませんか。

A どうして結構ですか、もっとお話を憶^{おぼ}えることができたらなあ、いつも思うているのです。

B み法^{みぽう}を熱心にお聞きにあらば、それでよいので、サッサとお忘れになって、しかも「ありがたかった」といわれる、それがほんとうの聞法といえましょう。

A どうもその点まだよく分りません、おぼえていたら、なおよいように思われまして。

B み法を憶えよう、おぼえようとするのはみ法を知識的にうけとることになります、知識としていかほどおぼえていても、それは「信」とはなりません。またみ法を聞くは他に語る為に聞くのではありません。たといその話をよくおぼえていて、それを他に話したからとて、み法が伝えられるというものでもありません、み法は自身へのみ法として聞き、反省し、それを実行しようとして心がける、それが一番大事な聞法の心得というものでしょう。あなたは不断に熱心に聞法されるので、それが尊いことで、話は忘れても「ありがたかった」

といわれる、そこが大事なところです。その有りがたいものが、おのずと生活の上にあらわれてくるそしてみ法も信仰もそれによって他に伝わってゆくものと思われれます。

A 少し分りかけてきました。

B 忘れるくらいなら聞かないほうがましだ、という人もありますが、とんでもないことです、理屈にもなっておりません、いずれお腹がすくから食べないほうがましだというにひとしい、そんなことはありませんわね、

聞くときは一心に聞いて、忘れてもよいのですよ、ずいぶん前のことですが、御殿場の大乗寺で椎尾先生（現増上寺法主）を中心とした共生きの集いの時、先生が「聞く時には一心に聞いて、話はサッサと忘れるがよろしい」とのお話がありました、休憩の時間になって或る婦人が先生に向って「先生は忘れてもよろしいと仰ったのでみんな忘れてしまいました」と申し上げたら、先生が「あなたは、忘れてもよろしいということだけ、よくおぼえているのですね、それも忘れてしまつては」と申されたことがあります。

今聞いて今に忘るる身なれども

なみあみだ仏の残るうれしさ

と歌にもあります。たえず聞法しゆくところにみ教を憶えるのでなく、み法が心身にしみこんでゆく、それが大事なことで、

で、「信は身に即くものだ」と古徳も教えられました。身に ついたら、それこそ忘れることもない、一々の生活にあらわれてくるでしょう、それこそ生きた信仰といえましょう。

A だんだん分つて参りました、信は身に即くものだということが大事なことでと分りました、しかしまた信は心の問題でもあると聞いていますが、

B 勿論、信は信心という言葉となっているように心と離れたものではありません。仏教では身心一如とか、色心不二とか申して、色（身のこと）と心は二つでないという、二つでないなら一つかという、一つというてはちがうので、一如だという微妙な言葉でその関係を示しています。心が大事だといって身をおろそかにしてはならぬのです。

正法眼蔵随聞記という本、道元禪師のお言葉を弟子の懷契（えいけい）禪師が記録した書で、道を求める人特に青年の方には一度読んでもらいたい本ですが、その第二に「道を得ることは心を経て得るか、身を以て得るか」という問題を出して、「仏教一般に身心一如というから身を以て得るとはいうていけるけれど、猶お一如の故に」というところが、まだたしかでない。禅では身心ともに得るのである。その中に心を以て仏法をもくろみている間は、いつまでたっても得られない、心を放下して自分の知見や考えを捨てる時に得るのである、景色を見て

悟り、声を聞いて道を悟った人もあるが、それもお身を以て得たのである、それゆえ、心のおもいはからい、知見などを一向に捨てて只管打坐（ひたすら坐禅）すれば、道に親しみ得るのである。だから道を得ることは正しく身を以て得るのである……とあります。禪の人は専ら坐禅する、念仏者は只一向に念仏する、かくて信は身に即くことになります。無量寿經には阿弥陀仏の光明に遇う者は「身も意も柔輭となる」とあり、また「一心に意を制し身を端すともあり、その他至るところ心だけではなく、必ず身のことが示されていることに注意したいのであります。

身が大切だからというて道を忘れて身ばかり可愛がるとなまけの因となります、ころせころせわが身をころせころしはて

無媒随録

須藤隆仙

地方の新聞社から依頼されて、新聞に『經典百話』というものを書いている。老大な仏教經典と取り組むのは、容易なことではないが、しかしその一々が、なにものにもか

なにもなきとき人の師となれ

と至道無難禪師のお歌がありますが、これは道心なくして徒らに執着する身なまけの身を指して「ころせ」と申されるのでしよう、そのような身をころす時に、その身は生きるといえましよう。そこを椎尾師表は「先ず身を生かせ」と教えられました、ころせと生かせとは矛盾した言葉ですがその意は同じところを示されたものと思われまます。師表は「身生きれば心も生き物も生き共生きの道が開ける」その身を生かすとは、このからだが生々と己がつとめを果すよう働くことだと説かれます。

A ありがとうございました、忘れっぽい私がこのままめぐまれておる有難いことだと見えてきました。信を身につけることですね。

えがたい教訓であることを、まず感謝せねばなるまい。

この仕事と取り組んで、つくづくと感じていることは、經典には、なんともいえない美しい響きがあるということである。

漢訳のものであろうと、梵本の直訳であらうと、その美しい響きには変りがな



く、読誦すればするほど、美しさを増すように思われる。

ひところ、よく經典を棒読みでなしに、わかるように訳して読んでくれ、と檀家の人たちから注文された時代があった。

さいきんは、あまりそのような声も聞かない。それどころか、音読には音読で、なんともいえぬ良さがあるとの声を聞く。

理に訴えるのではなく、情に訴えるものがあるのかも知れない。

某町の故人となった町長は、阿弥陀經の訓読がなんともいえぬといい、とくに「青色には青光あり、黄色には黄光あり、赤白には赤光あり、白色には白光あり」というところに恍惚とさせられると語ってくれた。

またある歌人は、齊藤茂吉が「青色には青光あり……」というよりは、「青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光」といったほうが有難いといい、その『赤光』という歌集の題名も阿弥陀經からとったものだ、と教えてくれた。

片方は音読がよいといい、片方は訓読がよいという。しかしそのいずれも、とにかく經典がよいということである。

いかなる形で読誦されようと、經典には無窮の響きがある。流すことのできない無窮の響きが、現代のこの私たちをも生々とさせてくれる。

その昔、天親菩薩には三人の兄弟がおり、兄は無着という有名な大乘の学者であった。反して弟天親は小乗を学び、勢いのまかせるところ、大乘を破斥しようとさえしていた。無着は深くこれを悲しみ、ある日病氣を理由に天親を呼びよせ、大乘の理を諄々と説き、また無着の弟子は外で朗々と『十地經』を読誦したのであった。それを聞いて天親は翻然として大乘の教えに身を投げ、ついに大乘仏教の学者として、勝れた業績を輝かせたのである。小乗について五百部、大乘について五百部、あわせて千部の論説を世にのこしたといわれ、千部の論主といわれる所以である。

私には大きく天親菩薩のみ心を動した『十地經』読誦の音が、勿体ないことではあるが、わかる気がするのである。經典の響きは、音として、光りとして、そして意^{こころ}として無窮に、無限に、広流することである。

わが読誦の声でも、他の人の読誦の声でも、無駄に聞いたりはいけないと思うこの頃である。

無一切中無尽蔵の思想

宝 田 正 道

(中央公論社編集・宣伝技術部長)

団扇画かずんば 意高きかな

わずかに丹青を著くれば 二に落ち来る

無一物の時全体現わる 華あり月あり楼

台あり — 白扇（良寛和尚漢詩集）

これは經典にいう「無一物中無尽蔵」の思想を端的に美化して表現した詩で、日本人の心にはよくわかるはずの芸術的視点をついたものである。

良寛は、江戸時代後期天保二年没の禪僧でまた歌人としても名高い。俗名山本栄蔵、諱は大愚という。雪深い越後の生れで、出家の後諸国を行脚し、帰郷してからは国上山の麓にある五合庵に住んだ。性恬淡、大愚の名のとおり、無邪氣に村童を相手として遊び呆けることも多かったので、逸話も少くない。

床下の笥が床板から畳をつきやぶって成長して来たので、わざわざそのため五合庵の屋根までこわしてのびるにまかせた、という話や、子どもらとかくれんぼ遊びをしていて、いつまでも正直に夜まで待ち呆けをくった話など、すでに一般によく知られている。しかし、その高潔な人柄を高くかわれて、村人か

ら敬仰され、またその書や詩歌にもすぐれたものが多い。女弟子の貞心尼との清らかな恋情や交友も、さすがにはほえましいエピソードとなっている。

この詩偈の意味は、何も書いてない白扇こそ清くて貴いのであって、下手な絵や字を書くくと、かえってその価値が下る。そのように無一物で我欲も我執も捨てたところに、無尽蔵の自由と無限の可能性が残されるものだ、というふうに解すればよからう。汚れなき白扇の例をとって、巧みに人生の処方箋を教えたものとして味わいが深い。ちなみに、白扇は、昔からめでたい祝いの席の引出物として用いられる習慣があるが、古来「余白の美」とか「白紙の文学」といって日本人は清廉潔白で汚れない「白」を愛し尊ぶ性格がある。白木の観音像とか、白木の念仏ということも人工を加えない自然そのままの素朴な材質や心情を基本として、これを高く評価したものである。

浄土三部經の一つである『無量壽經』に、「田ある者は田を憂え、宅ある者は宅を憂う」という言葉があるが、人間は、欲が深いから

生命や財産を惜しみ、欲しがるのが常である。しかし、美田をもっている者は、その田が荒されたり、雑草で一杯になることを恐れて案じなければならぬし、家をもっている者は火災や泥棒の用心に、しょっちゅう心を配っていないければならぬ。金銭や財宝を必要以上にもっていると、やはり同じ憂いに悩まされつづけること必定である。つまり、いかに多くの財宝を持っていたとしても、これをわがものと思つて執着する心を捨てないかぎり、常にかから奪われ損じられる憂いに身の細る思いで暮すものである。しかも、それらの七珍万宝は、たとえ蔵に満ちていようと、ひとたび無常の嵐が吹いて死出の旅に出れば、そんなものの、いくらあつても一緒にあの世までもつてゆくわけにはいかない。生きているうちに、苦勞して我執にとらわれ、生命をかけて守るほどのものではないのである。たかのしれた財宝に眼がくらんで、つまらぬ心配の種をふやすなど、まことに愚かなことである。いっそのこと、裸一貫で、何ももっていないければ、盗まれる恐れもなければ、火事や洪水にびくつくこともない。それこそ自由に、心

のおもむくまま足の向く方へ、人生を歩むことができないではないか。行脚の僧を雲水と呼ぶのも、雲や水のごとく、ものに執せず、自由に諸国を流れ歩くことのできる境涯に名づけられたものである。しかし、昔はともかく、現代生活においては、なかなか自由勝手な真似もできないし、裸ですごせば法律で罰せられる。やはり人並みに、家もお金も蓄える必要はある。要するに、それらを「我のもの」と思わないで過す心がけが大切なのである。

たとえば、ここに一個の壺がある。水が一杯入つていても音はしないし、空っぽのときも同じである。中途半端に少しでも水が入っている時に限つて、それはジャブジャブと、耳障りな音をたてる。人間もこの壺と同じで、学問でも信仰でも、半信半疑というか、宙ぶらりんというか、徹底的にやらないことが、一番見苦しいものである。学問なら学問を徹底的に究める。そして行詰つた時、その空しさが、逆に還愚痴への悟りとなつて戻つてくる。宗祖法然上人の生き方がそれであつた。水のつまつた壺と空壺と、同じく邪音の出ない状態が一体となるのであつて、無一物中無

尽蔵の思想の深さはここにある。

みのるほど頭を垂れる稲穂かな

という句が、また偉い人ほど腰の低いことを現わしている。人生は、バカになるための修行であると思えばよい。財宝でも知識でも、わがものと思つて他人にその額をひけらかそうとするから、より高い人からギャフンとやられて参るのである。いまだ至らざるものと自覺して、自分の有するものはすべて他人に布施するつもりでおれば、我執は消えて他に役立つ喜びにかわるものである。闘争心が平和にかえるのは、こういう時である。良寛は大人の知識を蔵しながら、童心の世界に遊ぶ知恵をもちあわせて、子供にそれを布施した人である。子供たちが馴つくのも無理はない。しつけが問題になつている昨今、親が大人の權威をかさにきて子供の心を動かそうと思つても、十分に童心になりきらなければ、効果がないのと同じで、児童教化の要めもここにある。一言でいえば、何事にも無心で当れ、ということになる。少しくでも欲や執着があつては成功しない、ということはこの詩は教えているのである。

(お経の話) その四

—無量寿経(上)—

念仏は一切に通ず

村 瀬 秀 雄

仏さまになる使命

阿弥陀さまは、はじめ法蔵という国王でした。ここがキリスト教や回教と根本的に相違するところです。他の宗教の神は、この世が始まる前から厳然といました全智全能の神であつたり、正義の神、愛の神であつたりします。もっとくだいて山の神や水の神、風や雷の神はこの世が始まると同時にいたことになりました。

仏教では原因のないところに結果を生じません。必ず原因に基いて、よい結果や悪い結果がでてくるのです。法蔵は国王の位

をすてて世自在王如来の許で出家し、比丘となりました。そして自分の持つべき使命を考え、その使命を果すにはどうすべきかの責任と義務について思案しました。

そして法蔵比丘は一つの理想をかかげ、将来必ずこれを実現しようとする指導理念をうちたてました。この理想というのは、将来自分が築きあげようとする国土の構想であります。仏には必ず仏のいる場所、つまり国土——浄土——があります。

經典にはこう説いています。

「わが作仏の国土をして、第一ならしめん。

その衆、奇妙にして、道場を超絶し、国は泥洹(涅槃)のごとくして、等雙なからん。

われまさに一切を哀愍し、度脱すべし。十方より来生せんもの、心悅清浄にしてすでにわが国にいたりなば、快樂安穩ならしめん」

法蔵比丘は自分が仏さまになった場合には自分の国土にあらゆる人々に來させて、その人々を心悅清浄、快樂安穩ならしめようというのであります。こうした大事業は容易に完成できるものでありません。従つて大理想をもつたならば、それだけの決心と努力が必要であります。法蔵比丘は己が決心を披歴してこう申されました。

「たとひ身をもろくの苦毒のなかにとどむとも

わが行は精進にして、忍んでついに悔いざらん」

そこで法蔵比丘は大理想を実現させるために、いよいよ国造りにかかることになりました。自分の国土を具体にどのようなに構

成するののかという設計にかかりました。このことを仏さまに相談すると、

「なんじが修行するところの莊嚴仏土、なんじみずからまさに知るべし、」

と自分の国土は自分で考えるべきであるといわれました。しかし理想が高いたけに自分独りで考えたのでは十分でありません。重ねて仏さまにお願いしたところ、それならばと仏さまは二百十億という多数にのぼる国土を参考にするため見せてくれました。法藏比丘はこれらを比較し、その性能、長所短所、美しさ等について詳しく検討しました。このように法藏比丘が単なる独創でなしに、すべての国土を比較研究した結果に国土の構成をつくったという点に一つの特色があります。

このように構想をねり、実に長い間の御苦心によって、法藏比丘は仏さまになられました。この仏さまが阿弥陀さまでありましたのでしょうか。經典にこう説明しています。

「阿難、仏にまうさく。法藏菩薩、すでに

成仏して滅度を取りたもう（涅槃に入る）とやせん。いまだ成仏したまわずとやせんいま現にましますとやせん。

仏、阿難に告げたまわく。法藏菩薩、いますでに成仏して、現に西方にまします。こを去ること十萬億刹なり。その仏の世界を名づけて安樂という

阿難また問いたてまつる。その仏、成道よりこのかたいくばくときをふとやせん。

仏のたまわく。成仏よりこのかたおよそ十劫をへたり」

阿弥陀さまは十劫の昔に仏さまになられました。劫というのは数え切れない位に長い年数のことでありますが、いかに大きな数であるといっても、年月を数える単位の一つに相違ありません。数字として、または概念として考えることは人間の能力の及ばないことです。十劫は無限とは違います。永遠ということではありません。あくまで一つの数量を示したものであります。従って阿弥陀さまはある時代に突如として現れた仏さまでもなく、この世の始まりと同時に現れた仏さまでもなく、現われるべくして十劫の昔に仏さま

になられたのであります。

四十八願の中心点

法藏比丘は極樂の構想をどのようにうち立て、そして実現させたのか。その具体的内容はどのようなか。その一つ一つを列挙し、説明して四十八項目が挙げられています。菩薩が自分の使命達成のために、一つの願いをたて実現させることを誓いますので、このことを誓願といえます。極樂の構成を列挙した四十八項目を四十八誓願というのも、こうしたわけです。

四十八という項目は、数からしても少ないものでなく、またその一つ一つに前後とか優劣とかいう順序がありません。しかし法然上人は四十八願のうちで、十八番目に挙げている願、即ち第十八願が中心であると申されました。第十八願があつてこそ他の願の存在価値があるというのです。何故でしょうか。その理由は簡単であります。即ち極樂が如何に立派であり、申し分のない国土であっても、そこにごく少数の限られた者だけしかゆけない特殊地帯であつた

とすれば、その意義が殆んど失われるではないかというのであります。

このことは三部経釈に説明されています。すべての菩薩の願いは、上は菩提を求め、下は衆生を化せんというものであります。しかし本来は前者よりも後者の下化衆生に重点がおかれているのです。法蔵菩薩の願いも同様であって、下化衆生即ち衆生をして極樂に來させることが願の最も大切な点であります。そしてお念仏を称える者は、必ず極樂に往かせると誓われたのであります。そして法然上人は次の通り申されました。

「弥陀如来は、国位の時、もはらわが名号を念ぜんものをむかへんとちかひ給ひて、兆載永劫の修行を衆生に廻向し給ふ。濁世のわれらが依怙、末代の衆生の出離、これにあらずばなにをか期せんや。これによつてかのほとけも、みづから我建超世願となりの給へり。三世の諸仏も、いまだかくのごときの願をばをこし給はず」

極樂を申し分のない国土にしたと同時に、そこには誰でもゆけるといふことが大

切な要件であります。そのために第十八願があるのであって、それは次の通りであります。

「十方の衆生、至心に信樂して、わが国にむまれんとねがひて、乃至十念せんに、もしむまれずば、正覺をとらじ」(念仏大意)

仏さまによって、どのようにしたならば往生の行となるのかをきめるのに、いろいろの違った方法があります。例えば往生の行を布施とするものがあり、持戒とするものがあり、禪定とするものがあるといったようなものがあります。そして阿弥陀さまは、乃至十念とされたのであります。

それならば阿弥陀さまが念仏を往生の行とされた理由は何のであるか。この説明はやはり法然上人のお言葉を引用しましょう。選択集にこうあります。

「何が故ぞ第十八願に一切の諸行を選捨し、唯ひとへに念仏の一行を選取して、往生の本願とするや。答へて曰く、聖意はかり難し。たやすく解すること能はず。然りといへどもいま試みに二義をもつて、これを解せば、一

には勝劣の義、二には難易の義なり。初めに勝劣とは、念仏はこれ勝、余行は劣なり。ゆ

ゑいかんとなれば、名号はこれ万徳の歸する所なり。(中略)次に難易の義とは、念仏は修し易く諸行は修し難し」

更に説明は続き、お念仏は男女貴賤の区別なく称えられますし、行住坐臥のいずれでも称えられますし、いつでもどこでも誰でも称えられます。ここが最も重要な点であります。

念仏は易きが故に一切に通ず。諸行は難きが故に諸機に通ぜず。然れば則ち一切衆生をして平等に往生せしめんがために難を捨て、易を取りて、本願としたまうか」

本願には乃至十念とあります。

この意味は上は一生涯を通じてお念仏を称えることから始まり、下は十遍でも一遍でもお念仏を称えることであります。

逆にいえばただの一遍のお念仏で必ず往生できるといふ信仰は、その有難さから一生涯を通じてお念仏を称えることであります。

阿
彌
陀
仏



阿彌陀仏如来像（平等院）

阿彌陀仏というと、私達、浄土教徒がその信仰の対象として御本尊として仰ぐ仏であることはいうまでもありません。そしてこの信仰は長い仏教の歴史の中で大動脈となつて、古く印度、中国、日本と多くの人々に讃仰されて来ましたがなる程、殆ど全ての經典に讃えられた仏である（荊溪大師）といわれるように、多くの經典にその名が見られるところでもあります。この仏の阿彌陀という名称はもとアミタ（Amita）という原語の音を写したもので、無限とか無量という意味であります。それではどうしてこの仏が阿彌陀仏と名づけられたのでしょうか。「阿彌陀經」にはこの仏が限りなき光明（無量光と限りなき生命（無量寿）を根本とするからであるといっています。つまり、この仏の光明は横に広くドコドコマデも照して全ての人類を利益し、しかもこの仏の寿命はこの世に困苦と不安のたえない限り滅することなく、堅にイツイツマデモ衆生を教化し導かれと云うこの仏の二つの威徳、言葉をかえると、この仏の智慧と慈悲とを円

満したすがたをもつて名づけられたのであります。こうしたことから、別にこの仏が無量寿仏とか無量光仏といわれるのであります。この外、經典にはこの仏の威徳をたたえて、十二光仏といって、いろいろの仏名が記されているのは、この仏の救いの絶大さを物語るものと云えます。そういう阿彌陀仏は全ての人類を救おうと理想の国土の建設を志し、四十八の誓願をたてて長い間、修行して遂に十劫以前にこの本願を成就して、阿彌陀仏となり、現に浄土にあって説法されつつある仏であると無量寿經に説かれています。か様に阿彌陀仏とその四十八の誓願とはきり離して考えることは出来ません。そしてこの一々の誓願は皆衆生のため（善導大師）といわれるようにこの仏の衆生済度の悲願に外なりません。このうち最も大切な本願はまごころから仏を信じ頼って浄土に往生しようと思ひ念仏すればたとえ十念であつてもその願の通り浄土に救いとうとうと云う第十八番目の念仏往生の本願であります。法然上人が特にこの仏の本願にきづかれ、私共に阿彌陀仏の救済の道を開かれたのです。（大谷旭雄）



観音菩薩像（法隆寺）

観世音菩薩

観世音菩薩は観音様として私達日本人の間に古くから親しまれています。観音様と申しますと、だれでも、あの美しいお姿とやさしさに満ちたお顔を思いうかべることでしょう。

観世音という名前は「世間の音を観ずる」という意味です。世間の音とは、願い求める世間の人々の音声であります。人間があるものを願い求める時は、身も心も口も（身・口・意と申します）一つになって求めるのでし

ょうが、その結晶を口すなわち音声として表わしているのです。細説は省きますが、観世音菩薩とは、世間の人々の願い求める音声を観じ救うことが自在な菩薩なのであります。

ですから観自在菩薩とも言われます。「悲華經」という經典によりますと観音は、世間の人々のあらゆる苦悩を救うまでは、自分は成仏しないという誓願をたてられたといわれます。インドから西域、チベット、中国、そして日本とこの菩薩が特に崇拝せられ親しまれているのは、みずから成仏することなく、慈悲の権化として、世間の人々の間にあって、あらゆる姿に身を変えて、苦悩を救う「やさしさ」によるものでありましょう。日本においても一宗一派にかぎらず広く信仰されていることは御存知の通りです。親しみやすいと言え、例えば東京では浅草の観音様といえど誰一人知らない人はいないでしょう。

浄土教徒の願い求めるものは言うまでもなく往生であります。観音はあらゆる苦悩を救う菩薩であります。考えてみますとあらゆる苦悩を救う究極は往生に外なりません。智慧慈悲無量の阿弥陀仏の救済の中、特にその慈悲を表わすものとして観音が配せられているのはそのためであります。観音像が蓮華を持つておられるのは「観無量寿經」に観音が蓮華台を持つて来迎するとあることによります。浄土宗の念仏は「声の念仏」であります。観音が人々の願い求める「音声」を観じ救うというのも、弥陀の脇士として、まことにふさわしいと申せましょう。（丸山博正）

勢至菩薩

阿弥陀如来の左右に、観音菩薩と共に右脇侍としてお坐りになつていらっしゃるのが、この勢至菩薩であります。梵語では Mahā-siṃha-dhātva（マハー・スターマ・ブラー・ブタ）と云い、観無量寿經に「智慧の光を以



観音菩薩像（法隆寺）

観世音菩薩

観世音菩薩は観音様として私達日本人の間に古くから親しまれています。観音様と申しますと、だれでも、あの美しいお姿とやさしさに満ちたお顔を思いうかべることでしょう。

観世音という名前は「世間の音を観ずる」という意味です。世間の音とは、願い求める世間の人々の音声であります。人間があるものを願い求める時は、身も心も口も（身・口・意と申します）一つになって求めるのでし

ようが、その結晶を口すなわち音声として表わしているのです。細説は省きますが、観世音菩薩とは、世間の人々の願い求める音声を観じ救うことが自在な菩薩なのであります。

ですから観自在菩薩とも言われます。「悲華經」という經典によりますと観音は、世間の人々のあらゆる苦悩を救うまでは、自分は成仏しないという誓願をたてられたといわれます。インドから西域、チベット、中国、そして日本とこの菩薩が特に崇拜せられ親しまれているのは、みずから成仏することなく、慈悲の権化として、世間の人々の間にあって、あらゆる姿に身を変えて、苦悩を救う「やさしさ」によるものでありましょう。日本においても一宗一派にかぎらず広く信仰されていることは御存知の通りです。親しみやすいと言え、例えば東京では浅草の観音様といえど誰一人知らない人はいないでしょう。

浄土教徒の願い求めるものは言うまでもなく往生であります。観音はあらゆる苦悩を救う菩薩であります。考えてみますとあらゆる苦悩を救う究極は往生に外なりません。智慧慈悲無量の阿弥陀仏の救済の中、特にその慈悲を表わすものとして観音が配せられているのはそのためであります。観音像が蓮華を持つておられるのは「観無量寿經」に観音が蓮華台を持つて来迎するとあることによります。浄土宗の念仏は「声の念仏」であります。観音が人々の願い求める「音声」を観じ救うというのも、弥陀の脇士として、まことにふさわしいと申せましょう。（丸山博正）

勢至菩薩

阿弥陀如来の左右に、観音菩薩と共に右脇侍としてお坐りになつていらつしやるのが、この勢至菩薩であります。梵語では Mañjarī-sūtra-pradīpa（マハー スターマ プラー プタ）と云い、観無量寿經に「智慧の光を以



阿彌陀二十五菩薩來迎図（金剛峯寺）

た一仏二菩薩の像があつて、その構図は実に雄大、聖衆皆彩雲に乗り

音楽、無踊、金色燦然たる中尊を囲んでみな面貌和悦、尊い極楽相そのままに画かれてある。またこの図は、もと、「十往生經」に「衆生ありて深く是の經を信じ、阿彌陀を念じて往生を願せば、彼の極楽世界の阿彌陀仏は、即ち觀世音菩薩乃至無辺菩薩を遣はし、行者を擁護す」とあつて、二十五菩薩は念仏者を平生お護り下さる菩薩であることを知る。それが浄土の三部經に説く臨終に聖衆來迎説と合し、古くから「二十五菩薩來迎」と盛んに唱えられ専ら念仏する者を、阿彌陀仏が二十五の菩薩と共に來迎され極楽國に安詳として引導すると拝まれるようになったのである。現に臨終行儀としてこの來迎図を掲げることが一般に行われていることでも分る。

さて、二十五菩薩の御名と何を指つて衆生濟度されるかと恵心僧都作

と云われる和讃によつて見ると
歸命頂礼極樂の 五五の菩薩の御ちかひ
念仏受持のともがらを、臨命終に至りてぞ
ります。大谷旭雄觀世音菩薩は觀音様として
私達日本人の間に古くから親しまれていま
す。

音楽異香の端をなし むかえ給うぞ頼

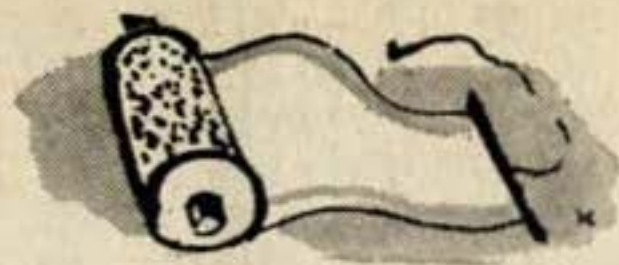
母しや

として次に御名と持物を説いているが、それによると、

- | | | |
|-----------|------------|-----------|
| 1 觀音(蓮台) | 2 勢至(合掌) | 3 藥王 |
| (幢幡) | 4 藥上(玉幡) | 5 普賢(幡蓋) |
| 6 法自在 | 7 師子孔(腰鼓) | 8 陀羅尼 |
| 9 虚空藏 | 10 德藏(笙) | 11 法藏(笛) |
| 12 金剛藏(箏) | 13 金藏(琴) | 14 山海隱 |
| (笙篳) | 15 光明王(琵琶) | 16 華嚴王(鈺) |
| 17 衆宝王(鏡) | 18 月光王(振鼓) | 19 日曜 |
| 王(羯鼓) | 20 三昧王(天華) | 21 定自在王 |
| (太鼓) | 大自在王(花幢) | 23 白象王(宝 |
| 幢) | 24 大威德王 | 25 無辺身(香) |

と明している。真に念仏者の平生はこの二十五菩薩に守られてい、人生生活を全うしているのです。

(金子真補)



家康と三河一揆

鶴田 湛泉

八日のことである。

西尾城に十分兵糧を納め終ると、酒井も兵をくり出して、家康に呼応して野寺八面の辺にしきりに火を放たしめた。

八面の城兵は関の声をきくと、スワと打って出て来た。寄手はわざと弱々と戦って置いて四五丁ばかり退き、誘いに乗って来る敵兵を待った。勝に乗じて敵兵は、追撃して来た。

思うところまで出て来た時、二隊に分れて機を待っていた岡崎勢は、左右からどっと攻めた。この時、一たん四五丁退いていた先手の兵も引き帰して来て、三方から烈しく攻め立てたので、たまりかねた敵兵は、我れ勝ちに城へと逃げ帰ってしまった。

家康が兵をまとめて凱歌をあげて小川の安政というところまで引きあげて来ると、本証寺の空誓の率いる鷲塚、野寺の一揆の兵参百余人が前途を遮った。

一揆を率いる野寺の本証寺空誓を初め、中島安楽寺、桜井の円光寺の三僧は、いづれも比類まれな剛強の荒法師であった。

十、八面城合戦

西尾城に立て籠っていた酒井雅楽助から、兵糧が余すところ僅かになった旨をしきりに訴えて来ていたが、一揆討滅作戦の最中のこととて、兵糧入の人数を割くことの出来ない現状だったので、家康は使を刈屋の城主水野下野守信元に遣って援兵を請うた。信元は直ちに、高木主水助清秀初め若干の手勢を率いて加勢にやって来た。家康は加勢の兵に兵糧の小荷駄を護らせると、この辺は荒川の勢力下にある故、万一途上で一揆の襲撃をされてはと、一たん矢作やせに出で西野を廻り六里ほど遠路して無事兵糧を西尾城に納め入れた。

その帰途、家康は荒川の居城である八面城を攻めた。二月

空誓はと見れば、日頃珠数つまぐる手に、鉄の棒を握り、安樂寺、円光寺の両僧は各々檜の木の大い八角棒を振りあげ振りまわし、僧も三河武士に劣るものかと気負い立って、夜叉天魔の荒れ狂うが如きすさまじい勢で打ってかかって来た。

これを眺めた家康は、

「彼等は音に聞えた大力の悪僧どもであるぞ、打ち物取つての勝負は詮なし、皆でとりかこんで討ちとってしまえ」と叱咤した。

その声の下に、旗下の酒井雅楽助初め、本多平八郎忠勝、石川、近藤、今村、安藤等、何れも馬上達者な射手達、彼等目がけて馬を馳せて射かけ、馳せ違えては追物射に射立てた。僧形の彼等も一揆の兵を指揮しながら、獍猛な豹のやうに狂って抗戦して来た。

この時、手勢を引きつれて救援に馳せつけた水野信元は、横合から一揆の真っ只中へと打ってかかった。これに勇氣百倍した岡崎勢は遮二無二斬ってかかった。

一揆勢は散々に打ちいためられて、敗走し始めた。

逃げまどう一揆の徒に対して、尚も追い討をかけた。この時水野の家臣高木主水助清秀の勇戦ぶりは物々しかったので、一揆平定後、永祿七年六月、この時の功により所領安堵状が家康から与えられているほどである。

一揆の一方の隊長、鈴木弥兵は水野の家人上田半六のため討ちとられてしまったし、例の桜井の円光寺も深傷を負うてしまつて、逃げのびることがむづかしいと観念するや、高峯に登つて、

「本証寺の空誓、穢土の縁すでにつきて、弥陀の浄土に只今往生する有様を見よ」

本誓寺の空誓の名をかたつて、大音声に呼ばわった。

岡崎勢が見守る中を悠々と上帯^{ウラオビ}プツリ押し切り、鎧を抜きその場に投げすてると、腹一文字に立腹切つて見せ、ナムアミダブツと唱え終るや、刀のきつ先を口にくわえ、高峯の上から真逆さに落ち貫かれて最後を遂げてしまった。

円光寺坊の見事な最後と、本寺に対しての忠節ぶりは、僧ながらもけなげである、敵味方とも称嘆していた。

そのひまと本証寺の空誓は、一揆の残兵をまとめて引き上げて行つた。

日も既に黄昏に迫っていたので、家康も岡崎城に帰つたが、一揆の余焰は未だなほ悔りがたいものがあつた。

十一、岡崎城襲撃

二月十三日、家康の命によって石川又四郎、根来十内、布施孫左エ門等二十五名は、針崎の勝鬨等の敵状を偵察のため遣わされた。

ところが伏兵をかくしてあったものか、寺の間近まで来たとき、道の両側の灌木の茂みの中から数十名の伏勢が、不意にワッと声をあげて襲って来た。彼等が偵察に行くことを、早くも一揆方にさとられてしまったものらしい。

渡辺半蔵、同半六、蜂屋半之丞、寛助太夫等の例の猛者が槍を光らせて取り巻いて来た。

スワと岡崎勢も渡り合い、ここに双方入り乱れての戦となった。

思いがけないこととて、石川は早くも深傷を負わされて引き退いてしまった。

根来十内は渡辺半蔵と槍を合せていたが、半蔵のため突き伏せられたところへ、半六が走り寄って有無を云わさず首をはねてしまった。

布施も寛助太夫とむんずと組んで、上を下へともみあっていたが、彼のためあえなく討たれてしまった。

家康の命によって遣わされた物見の兵は、敵状の偵察はおろか散々な敗北を喫して、やむなく岡崎城へ引きあげざるを得なかった。

同じこの日、いつも上和田の大久保党のためさえぎられて果さなかったが、今日こそ岡崎城内へ乱入せんものと、佐崎上宮寺の一揆の精銳参百有余、矢田作十郎に率いられ、「足

を進む者は、極楽世界に往生し、足を退く者は、無間地獄に墮落す」と咆哮しながら、高らかに念仏唱え法悦の世界に酔ったかのように旺盛な士気に煽られて、「南無阿弥陀仏」と、大書したのぼり旗、教流押し立て、かねや太鼓で氣勢をあげ、怒濤の勢で岡崎城を襲撃して来た。

機を逸せず城内からは、直ちに城門を開いて応戦に出た。

矢田が将となって城を襲って来たと、血相を変えて近侍が知らせると、家康は、「城へ押しよせるとは、思い上った奴め。矢田は一揆の中でも尤も剛の者ぞ。味方はいつも彼のために悩まされている。今日も真先きかけて来るに違いあるまい。他の者に目をくれず、是非矢田を討ち取ってしまえ」

怒髪天を突く如く命じた。家康の想像した如く矢田は、先鋒となつて一揆を指揮していた。家康の不知を体して鉄砲の筒先をそろえ、今日こそ逃がさぬぞと手ぐすねひいて待ち構えていた鉄砲隊は、矢田が近づくと頃を見計って一斉に火ぶたを切った。一斉射撃にあつては、さすが鬼神の如き矢田も、馬上よりもんどり打って落ちた。それと、切っ先揃えて矢田の首を我が手に落さんものと殺到して行った。そうはさせじとする一揆との間に、暫し乱斗が続けられた。

かろうじて矢田の屍を抱きかかえると、岡崎勢の猛反撃に辟易した一揆は、上宮寺の方面へ遁走して行った。



みんなの法然さま

——大衆のために——

高橋良和

さしえ 小林健造



名は体をあらわすという諺がある。人間というのはおもしろいもので、名前をみると、その人の性格がわかるということである。

法然という名もそうであって、史伝には法然道理のひじりということが、そのまま法然と名を改めたとなっているが、法然とはまことに融通無碍、まるで水が低きにつき、いろいろのうつわに従ってそのかたちを変えるように法然上人の人は全く春風台蕩、風吹かば吹け、雨降らば降れ、自然のまに、全く何のくったくもない心もちであると想像するが、それはあらゆる苦勞や辛苦の積重ねを越えた上でないと、にじみ出ない人格なのである。

そういう人柄のなかにも、己を律するには実にきびしく、浄土宗を開いたのちも、一日に五万六万の念仏を称えたり、また四国に流罪に遇うときでも、なおこのことだけは云わなければならぬと、念仏を止めよという禁止令が出ていても、念仏を止めないという強い決意が湧き出るといふ人格の上に、この法然、自然のままの春らんまんのおおらかな心を備えた方なのである。

比叡山での勉強は実にきびしく、あらゆる先輩の人たちを師と仰いで、それこそ螢の光、窓の雪と一生けんめいの努力が払われたのであるが、法然上人のよき師となった人には西塔黒谷の慈眼坊（じげんぼう）叡空（えいくう）をはじめ南

都の藏俊僧都（そうしゅんそうず）醍醐の権律師寛雅（こんりつしがんが）仁和寺の法橋慶雅（ほうきょうけいが）中川



の実範などいろいろな人たちに会っておしえを請い自己の所信を正したのである。

砂金をより分けるのにはいろいろな砂をザルに入れて、金でない雑物を捨ててしまおうと、そこに金が残るのである。

法然上人も、いろいろな学問を勉強することによって、そのなかから、純一無雑なものを身につけるように、それが浄土宗の開宗という生一本のまじり気の無い、しかもそれがどの人にも取り入れられる、浄土宗のおしえとなつてあらわれたのである。

お釈迦さまが仏教を創められたということのなかに、バラモンというおしえの学問をされたり、苦難の道を通られたと同じように法然上人も、当時中国から入ってきた実にむずかしい学問、天台、真言、法相（ほっそう）それに三論（さんろん）といった学問をしたが、それは道ぐさでなくて、さとり道の道に咲く花を一つ二つ摘まれたのであると解釈したのである。

二から一をとるのはなかなかむづかしい。でも十から一を選らぶのは易いのである。それと同じように、数々の学問から、純一なものを取り出すことはかえって易いといえるのである。

それは法然上人が四十三才のときである。

承安五年というから、今から七百九十一年前である。

あるときというより、毎日図書室にこもって勉強しているなかに、比叡山の黒谷の書庫で手にされたことばにはたと手をうって、そこに新らしくおしえを建てる決意をしたのである。

そのことばというのは、

一生けんめいに雑念なく、なむあみだ仏の仏のみ名を称して、いつでも、人を選らばずこれをつづけていると必ず救われるのであるこれは仏のちかいであるから必ず救われる。

ということである。

これはあらゆる修行よりこのなむあみだ仏の念仏がすぐれているということであって、これこそ大衆を救う最短距離であると自覚されたのである。

これが浄土宗の生れた原因であって、仏のちかいによる救済ということが、あらゆる修行のなかからなむあみだ仏の念仏がすぐれていることをあらわすのである。

浄土宗では今、この法然上人が浄土宗を開かれたことを開宗といって、これから九年するとその記念法要が営まれることになっている。

承安五年、春、法然上人四十三才のときということをよく心におぼえておいて欲しいのである。

こうして法然上人は、念仏のおしえをもって大衆が救えるという確信を得ると、比叡山を出て、いよいよ京都の地に出る、念仏を弘めることになるのである。

まずその最初は京都の東山と向い会った西山の広谷（ひろたい）という土地である。京都から阪急電車に乗って、約二十分、長岡という駅で降りてそれからバスで十分も行くと粟生（あお）光明寺本山の門前につくのである。そこで「浄土根元地」という石柱が目に入る。これが光明寺本山で今いう広谷の地である。これはあとで書かなければならないが、法然上人が亡くなってからの出来ごとにも、この光明寺が大きな役割をつとめるのであるが、上人は、「この地は非常に念仏の申し易い土地である」といわれている。然しここのお住居はわずかであって、その後また居を改めて、京都東山の吉水のほとりに居を移したのである。ここは、今の知恩院のあたりをさすのであるが、「東山吉水のほとりにしずかな地ありける」とあるから、東山山麓の地は今と同様、昔から静かな場所であったと思うのである。ここで法然上人の念仏によるみちびきがはじまったのである。当時比叡山を出て、大衆への救済を標榜したこの念仏のおしえは、どれだけ魅力あったのだろうか。京都の人たちは、この吉水のほとりに集まってきたのである。上人のおしえはたしかに大衆と血の通った、生き生きとしたおしえであったのである。

進学期を迎えた子と母

林田さん、四十二才の主婦。高校二年になる一人息子のことについて相談したいと来所した。息子が進学を一年後に控えて、最近落ちつきがなくなり、勉強が手につかない。また、どうも悪い友人とつきあい出したらしい。原因は、自分の望むコースに進ませてくれないと言うことらしいが、息子の望んでいくコースというのは、今希望している一流大学へ入れなければ、他の大学は受けない。もう勉強はしたくないから、好きなバンドボーイになる。家を出て働く、など出来そうもないようなことを言って反抗する。ひどい時には母を殴ったり、父に物を投げたりするの

父は殆んど無関心で、接触するのは叱る時だけであった。母はひどく厳しくした反面、物

を買い与える時など少年の求めるままに与えるという矛盾した態度があった。少年は学校の成績はよかったが、性格が弱く、反面依古地などころがあった。母は、父との葛藤が少年の性格によくない影響を与えていることがわかっていながらどうにもならなかった。

少年が小学校五年生の時、学校の先生から注意を受けて、父には女と手を切ってもらった。しかし、その頃は、すでに少年は、父に対して批判的な態度をとり母をかばうようになっていた。最近では身体も成長し、父が幼少時ほど厳しくなくなると、まるでし返してもするかのように反抗し、母には甘えている反面、すっかり馬鹿にして言うことをきかないと言うのである。

以上のようなことが、大変混乱した調子で語られたのである。少年を来所させるか尋ねると、母は、自分が相談に来たことすら秘密にしているの、少年を連れて来るのは不可

能だというのである。そこで、母が出来る範囲でどのように少年を扱ったらよいのかについて、更に話しあった。

まず進学問題について、あまりに子供の将来について、親の決めた安全なコースを押しつけすぎているかどうか、その点もう一度家族でよく話しあうことを指示する。次に、学校での少年の態度について、母自身がこまかいことに干渉し、そんなことでは落第してしまうというような脅かしの表現をしていたことである。たとえ子供に間違いがあっても、それを責める前に、支えてやる気持で子供の良い面も発見してやること、間違いは、子供自身が気づくように仕向ければ反撥しないのだということを話すと、母は、自分の方が先に不安になって子供を叱り、そのため少年が不安定になっていることに気づいたのである。それ以後、母は、急に明るい表情になり、早速、先生に教えていただいたようにやってみますと言って、かなり長い面接を終ったのである。

(口 和子—大正大学

カウンセリング研究所)

この身きよくして

— 焼 香 —

心にしみついた垢はなかなかとりにくい。肉体に垢がついたり、汗くさいときには、感覚によって知ることができ、そのよごれは、洗い流すこともできよう。しかし、心のよごれは、なかなか気づきにくいものである。自分のなしている行為に、反省がなされる場合には、みずからの心の中にくさに気づくこともあるが、平生、あたりまえとうけとって生活しているときは、心のよごれに気づくことが少ない。信仰とは心向に通ずるもので、心を向けかえることでもある。自分と相對している他人の世界にのみ心に向けて、自分自身の内なる心、すなわち主体的な、おのれの心に眼をむけることができないのが、お互凡夫のわれわれである。自ずからのみにくさに気づくとともに、けがれをきよめて、清浄な身と心を保つことが、人生という、けわしい道を生きぬくる上に、どうしても牛馬なことである。香をささげること、または焚くということは、香により、身も心も清めることを意味するのである。み仏の前に、姿

勢を正して、右手で一つまみずつ、額のところまでいただき、一度、またに三度くべる習慣がある。

一度は、一心をあらわし、二度は、仏と衆生をあらわし、三度は、戒、定、慧、すなわち人倫のみち、かたい意志、めざめた生活におもいをこめて、それぞれかたちどつたといわれている。又、至誠心（真実に浄土をねがう心）深心（深く浄土を信ずる心）回向発願心（修める功德を回向して浄土に往生せんと願求する心）の三心にあてはめて、おもいをこめて焼香する意味もある。

現代人は、心をそまつにあつかいすぎる。感覚のできる世界のみをよりどころとして、感覚できない世界を、否定したり、うとんじたりする傾向がある。唯物的な世界観のみしかもちえぬ人は、まことに気の毒である。

考えようによっては、人間が感覚できる世界は、大きな宇宙からみれば、極水の世界である。むしろ感覚されない世界が、無限に展開しているのである。現代のように、おもいあがっているわれわれは、一片の香木を焚くことにより、本来の人間性を回復して、身も心もきよめ、しずもりの中に、謙虚な自分をみつめ直してみたい。



編集後記

○昭和四十九年の浄土宗開宗八百年を目ざして、宗門は、内外あげてその準備に取りかかることになった。
○この時こそ、本当に法然上人鑽仰運動をもちあげ、浄土信仰の弘布を、はからねばならない。本会も、その意味で、鑽仰運動の一翼をにない、大いに活躍する

ことにしたい。

○東京での再出発は、昨年十一月に終わったので、四月には、御忌会を期して、京都での浄土大会を企画している。寺内大吉先生の講演会や、パーティを行い、誌友倍加運動をやることになった。大いに御参加願います。

た。少し赤やけされたが、元氣そのものであった。
○宝田先生の人生読本は、好評のうちに、一年を終って頂いた。又新しい企画で近い内に登場願うことにしたいと思っています。有難うございました。
○口絵として、挿入しましたお釈迦様誕生図一部十三円でお分けます。
申込みは鑽仰会まで。

「浄土」講読規定

一部 定価 金六十円

(送料 六円)

会費一力年 金七二〇円

(送料 不要)

浄土 四月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十一年三月二十五日 印刷

昭和四十一年四月一日 発行

定価 六十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

東京都千代田区飯田町一ノ二二

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

浄土トラクト

ものいう石	大正大学 教授文庫	竹中 信常著	新書判 150P	価 150円 〒 40円
諸仏の戒め		村瀬 秀雄著	B 6判 4P	価 5円 〒 10円
四季の寺まいり	大正大学 助教授	安居 香山著	新書判 20P	価 25円 〒 10円
—浄土宗の年中行事—				
経本 浄土宗	檀信 徒用	のおつとめ 村瀬 秀雄編	価 90円	〒 20円
選択集私解	大正大学 教授文庫	竹中 信常著	新書判 120P	価 120円 〒 30円
一枚起請文をめぐって		村瀬 秀雄著	新書判 102P	価 120円 〒 30円
真理のはなたば	大正大学 教授文庫	佐藤 良智著	新書判	価 70円 〒 20円
ご法語のしおり 葵ぐさ		村瀬 秀雄著	B 6判 16P	価 15円 〒 10円

念仏をひろめるために心をそそぐ布教家に (多数申込みには)
真実の信仰をもとめている檀信徒の方々に 割引いたします

発行所 法然上人鑽仰会 電話 (262) 5944
振替 東京 82187

—たのしい本でただしいあゆみ—

—大道社 こどもの本 シリーズ—

新刊 おしゃかさま B 5判 48ページ
価 130円 〒 50円

指導 高橋 良和 画 野沢ともかつ

..... 既刊

奈良の大仏さま めぐみ

B 5判 48ページ
価 150円 〒 50円

B 5判 32ページ
価 100円 〒 0円

久遠の仏さま 地獄と極楽

—法華経七つのたとえ—

B 5判 64ページ
価 130円 〒 50円

B 5判 64ページ
価 5判 〒 50円

発行所 大道社 東京都千代田区飯田町 1の2 1
TEL <262>5944 振替 東京 8247番